

Critical Thinking と Independent Thinker

松本 康子

家庭で出来る子育ては子ども達が 18 歳になるまでと、私は明確に線を引いていました。子どもの知らないことや出来ないことの肩代わり（子育ての一つ）を、親が代わったり教えたり出来る限界は、漠然とですが、その年令 18 歳までという意識があったからです。結果的に、現地校の教育の一つの Critical Thinking がこの考え方をサポートしてくれました。

<あいちゃんの Critical Thinking >

三女のあいちゃんは、6 年生の社会科の歴史でフランス大革命を習いました。その単元の最後に「問題 1、革命の原因と考えられる歴史上の事実を勉強しました。では、あなた自身が革命の原因と考える事実を 2 つ揚げなさい。問題 2、その理由を述べなさい。問題 3、あなたが挙げた理由をもとにして、革命に対するあなたの意見を述べなさい。」とありました。こんな問いが小学校 6 年生へ出題されたのですから、驚きました。

おそらく、教科書から歴史的背景を読み取ることはできても、問 3 の自分が考える原因や理由、そして意見となると、三女は苦手意識があって、どう回答したらいいのかわかったのでしょうか。私も、現地校の勉強は手伝えないと思ってはいても、子ども（特に末っ子）からヘルプと言われれば、頭ごなしに「できない」とは言えません。このときは、英語で書かれた社会の教科書すべてを理解できなくても、一応、子どもと一緒に問題を読みました。

案の定、子どもの意見を引き出せるようなアドバイスさえ思いつかず、まったくお手上げです。

こういう場合の親の常とう手段で、「お姉ちゃんに聞いてみたら?」と口を濁しました。それに対して、「自分の意見や理由を書かなくちゃいけないのに、お姉ちゃんに聞いて書いたら、勉強にならないからだめなの。」と言うところを見ると、結局、どんな回答になっても、自分で考えなくては行けないと分かっているようです。

この時、章末のタイトルが Critical Thinking（以後 CT と表記）とあり、学術的な詳細は分かりませんが、漠然と現地校の学習法の一つを知ったのです。

<りほちゃんの CT >

数年後、今度は、現地校の学習になぜ CT という問いが設けられているのか、その理由の一端を解き明かしてくれるような機会がありました。

滞米 2 年のお子さんで、りほちゃんという 8 年生が我が家で理科の勉強をすることになりました。最近、中学生でも「地震」の横波や縦波の物理学的な知識、震源地から被害地までの距離や時間などの解釈や理解、また計算法までと、そんな知識が必要なのかしらと疑うほど難しい内容を、日本語で解説してもらっていました。そして、章末には「問 1、あなたは地震について何を学びましたか。問 2、もしあなたが M6 の地震に遭うとしたら、次のどの方法が対策案として適しているかを選びなさい。問 3、自分で具体策を 3 つ挙げ、その理由を述べなさい。」とありました。ここでもまた最後に、CT の問題です。



身近な例として実際に、問 2 では、よく目にする家具や食器棚の設置の仕方などを、具体的な絵で見せ、選択させています。ですが、問 3 で、本当にその方法が自分の住まいに適しているかどうかを考えさせ、独自の対策案を練らされています。策を見つけ出すのに、教科書の中に書かれた事実や理由を、自分なりに解釈して自分の選択としなくてはなりません。

それにどうやら、この地震の單元では、学校で得た知識は実生活に役立てられるのだと、教えることにあったのでしょうか。子ども達は、正しい知識を身につけ、それをきちんと理解し、分析して応用する力を培わなければいけないという、大事な論理に導かれています。

それにどうやら、この地震の單元では、学校で得た知識は実生活に役立てられるのだと、教えることにあったのでしょうか。子ども達は、正しい知識を身につけ、それをきちんと理解し、分析して応用する力を培わなければいけないという、大事な論理に導かれています。